様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３４５５

研究課題名（和文）信頼関係形成状況における適応的行動の解明

研究課題名（英文）Investigation of adaptive behavior in formation of mutually trusting relationship

研究代表者
高橋　伸幸（Takahashi, Nobuyuki）

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：８０３３３５８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、信頼のマクロな社会差の説明原理と、二者関係におけるマイクロな信頼の説明原理との間の関係を明らかにすることを目的に、二つの実験研究を行った。第一実験の結果は、相互協力関係が達成されると信頼は生まれるが、信頼性は生まれないことを示し、第二実験の結果は、自分が他者と比べて特に信頼されたと感じても信頼性は高まらないことを示した。このことは、マイクロな信頼と信頼性の形成過程について更なる研究が必要であることを意味する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会において信頼が重要な役割を果たすということには、社会科学全般において広く合意が存在する。しかし、これまでは信頼の社会差を説明する研究と、二者間で構築される信頼関係についての研究は、独立して行われてきた。本研究の結果は、社会差を説明する理論では特定の二者間における信頼関係構築は説明できないことを示した点で、大きな意義がある。今後は、特に信頼性の動的な変化の可能性について、更なる検討が臨まれる。

研究成果の概要（英文）：The current research project aims to investigate the relationship between the mechanism that explains societal differences of trust and the mechanism that explains trust building within dyads. Two laboratory experiments were conducted. The result of the first experiment showed that trust developed as a result of a high level of cooperation in repeated interaction. Trustworthiness did not develop, however. The result of the second experiment showed that the trustworthiness of the trustee was not higher when he felt that he was trusted more than the other trustees. These results imply that further investigation of the process of trust and trustworthiness is necessary.

研究分野：社会心理学

キーワード：協力　信頼　互恵性

１．研究開始当初の背景

人間社会において信頼が重要な役割を果たすということには、分野を超えて合意が存在しており、これまでに様々な研究が行われてきた。その中で、90 年代後半から信頼研究の焦点の一つとなってきたのが「信頼の解放理論」（山岸, 1998）である。山岸は、他者一般の信頼性の推定値である一般的信頼が社会のあり方と不可分であり、一般的信頼のレベルの社会差はニッチ構築の一環として解釈可能であることを、理論、実験、調査など複数の手法を用いて明らかにした。しかし、信頼研究の流れにはもう一つ、二者間において信頼関係を構築するプロセスについての研究があり、一般的信頼のようなマクロな信頼との関連は未だ明らかにされていない。本研究は、信頼研究のこれら二つの流れに焦点を当てた実験研究と理論研究を行うことで、マイクロな信頼という現象の説明にはマクロな信頼の説明原理とは別の理論体系が必要である可能性を探るものであった。

２．研究の目的

他者の行動にはほとんどの場合、不確実性が伴う。そのため、他者との間に相互依存性がある状況下では、人々は相手の行動の予想に基づいて自分の行動を決定する。つまり、社会生活は信頼なしでは成り立たないのである。このような信頼の重要性は、心理学のみならず、社会学、政治学、経済学など、様々な社会科学諸分野において広く認識されており、数多くの研究が行われてきた。その中でも 90 年代後半から注目を集めてきたのが、信頼の解放理論（山岸, 1998; Yamagishi, 2011）である。他者一般に対する信頼のレベルは社会によって異なるが、この理論はその理由を説明する。閉鎖的な村社会において同じ相手と繰り返し相互作用している限り、一般的信頼の存在意義はない。しかし、機会コストの増大に伴い、集団の枠を越えて新しい他者と相互作用を行うことの適応的意義が発生する。このとき、既存の関係の呪縛から人々を解放するのが一般的信頼である。このように、信頼の解放理論は、個人レベルの行動原理とマクロレベルの社会構造の間の動的関係を直接的に扱う、画期的な理論であった。

しかし、社会生活において重要なのは、新たな他者と相互作用する機会を逸しないことばかりではない。相手との関係を深化させることも重要である。人間関係には、顔見知りから親友まで、様々なレベルがある。お互いに自分の命をも預けられるような親友関係を築くことは、困難ではあるが、非常に価値が高い。これは、個人間関係に限った話ではない。企業と消費者の間、あるいは国家間の外交関係においても、信頼関係を醸成することの重要性は、常に語られている。また、社会科学諸分野においても、このようなマイクロな信頼関係構築に関する研究は、数多くなされてきた。しかし、社会の潤滑油としてのマクロな信頼の研究と、マイクロな信頼の研究は、同じ信頼という言葉を用いながら、ある程度独立に行われてきており、両者の間にどのような関係があるのかは明らかではない。本研究はこのようなマイクロとマクロの間の断絶を解消し、信頼という現象を統一的に適応論的アプローチにより説明することを試みる。適応論的アプローチとは、人間の持つ心理・行動傾向を、それを持つことが社会生活の中でうまくやっていけるために備わっていると説明する原理である。ただし、経済学が前提とする、無限の認知能力を持つ合理的意思決定者を想定するわけではない。進化や学習により、本人が意識せずとも適応的な心理・行動傾向が備わっていると考えるのである。この適応論的アプローチは 90 年代から社会心理学にも導入され、大きな成果を挙げつつあるが、本研究もその大きな流れの中に位置づけられる。

３．研究の方法

（１）相互協力関係は相互信頼関係を生み出すか

マイクロな信頼関係形成場面において相互協力を達成することが持つ意味を検討した。信頼の解放理論によれば、二者間で繰り返し相互作用を行う状況で相互協力が達成されても、相手に対する信頼は生まれないはずである。なぜなら、そのような状況では相互協力か相互非協力以外の帰結は存在しないため、信頼性の高低にかかわらず、どんな人でも協力するはずだからである。即ち、「安心」は「信頼」を生み出さないのである（山岸, 1998）。そこで本研究では、実験室実験により、この主張を検討した。実験状況としては、相互協力関係を引き出すための継続的に取引を行うステージに、信頼を測定する最後のゲームを一回のみ行うステージを追加する形をとった。継続取引では、先行研究において極めて高い協力率が達成されることが分かっているリアルタイム依存度選択型囚人のジレンマ（寺井・森田・山岸, 2003）を用い、最後のゲームとしては一回限りの同時依存度選択型囚人のジレンマゲームを用いた。最後のゲームは同時に行われるため、ここで相手に資源を預けることが信頼行動にあたる。

（２）信頼感と信頼性との間の相互影響過程の検討

先行研究のほとんどでは、信頼される側の信頼性は個人特性として捉えられており、例えば信頼性の低い人はどのような状況であってもどのような相手に対してでも裏切る傾向があると考えられていた。しかし、信頼関係を形成していく過程をコミュニケーションであると考えるならば、信頼性はこのように定数として扱うのではなく、相手からの働きかけに応じて動的に

変化する変数であると捉えるべきであろう。そうすることにより、信頼関係の形成が予言の自己実現と同様の原理で生じる可能性を検討することができる。そこで本研究では、実験室実験により、信頼されることが信頼性を引き出すかどうかを検討した。これまで、この点に関する先行研究の結果は一貫していない（Berg, Dickhaut, and McCabe, 1995; Hayashi, Ostrom, Walker, and Yamagishi, 1999; Kiyonari, Yamagishi, Cook, and Cheshire, 2006)。それは、通常の実験室実験では信頼された側が自分が他者と比べて特に信頼されたのだということが分からないからではないかと考えられる。そこで、信頼される側（B とする）が書いた意見文を信頼する側（A とする）が読んだうえで、A が B を信頼するかどうかを決定する条件と、A が B に関する情報を一切持たずに B を信頼するかどうかを決定する条件を設け、それぞれの条件の中で去らない参加者内要因として、A が全ての B を信頼するタイプ（A1 とする）なのか、特定の B のみを信頼するタイプ（A2 とする）なのかを操作した。

４．研究成果

（１）の実験では、継続取引においては予想通り高い協力率が達成され、最後のゲームでは高いレベルの信頼行動が見られた。ただし、最後のゲームで信頼されたことに対し、参加者がそれに応えて信頼性の高い行動をとったわけではなかった。これは、マクロな信頼の説明原理である信頼の解放理論からは説明できない現象であり、マイクロな信頼という現象の説明にはマクロな信頼の説明原理とは別の理論体系が必要である可能性を示唆する。

（２）の実験結果は以下のことを示した。B の立場であった参加者は、他の条件でよりも意見文を読む条件の A2 は自分だからこそ信頼してくれたと思ったが、実際の行動としての信頼性には差が見られなかった。このことは、B の立場である参加者は、自分だけが特に信頼されたとは感じても、行動としてはそれに特に応えることはなかったことを意味する。よって、本実験により、信頼は信頼性を引き出すわけではないという負の証拠を更に積み上げることとなった。

＜引用文献＞

Berg, J., Dickhaut, J., and McCabe, K. (1995) Trust, Reciprocity, and Social History. Games and Economic Behavior 10(1), 122-142.
山岸俊男(1998) 信頼の構造 東京大学出版会
Hayashi, N. Ostrom, E., Walker, J. and Yamagishi, T. (1999) Reciprocity, trust, and the sense of control: A cross-societal study. Rationality and Society, 11(1), 27-46.
寺井滋・森田康裕・山岸俊男(2003) 「信頼と継続的関係における安心：リアルタイム依存度選択型囚人のジレンマゲームを用いた実験研究」 『社会心理学研究』, 18(3), 172-179.
Kiyonari, T., Yamagishi, T., Cook, K> S., and Cheshire, C. (2006) Does trust beget trustworthiness? Trust and trustworthiness in Two games and two cultures: A Research Note. Social Psychology Quarterly, 69(3), 270-283.
Yamagishi, T. (2011) Trust: The Evolutionary Game of Mind and Society. Springer.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。